

## Cloningerの気質・性格次元に対するネガティブ・ ライフイベントの影響

The Impact of Negative Life-events on Scores of Cloninger's Temperament and Character Dimensions

高橋 雄介      山形 伸二      袴田 優子      木島 伸彦

Yusuke TAKAHASHI

Shinji YAMAGATA

Yuko HAKAMATA

Nobuhiko KIJIMA

東京大学大学院  
総合文化研究科  
Graduate School of  
Arts and Sciences,  
The University of Tokyo

東京大学大学院  
総合文化研究科  
Graduate School of  
Arts and Sciences,  
The University of Tokyo

名古屋大学大学院  
教育発達科学研究科  
Graduate School of  
Education and Human  
Development, Nagoya  
University

慶應義塾大学  
心理学研究室  
Psychological Laboratory,  
Keio University

### 問題と目的

Cloningerの提唱するパーソナリティの7次元モデル(以下、Cloningerモデル)は、パーソナリティを気質(temperament; 4次元)と性格(character; 3次元)という2つの大きな下位次元に分けて記述するもので(Cloninger, Svrakic & Przybeck, 1993), 気質次元と遺伝子多型との関連が指摘されたこともあり、精神医学領域を中心に注目を集めているパーソナリティ理論である。

まず、Cloningerモデルにおける気質とは、相対的に遺伝規定性の高いものであり、主として遺伝や幼少期の経験によって形成され、比較的安定したパーソナリティの一部として機能するものである(Cloninger et al., 1993)。具体的には、(1) 新奇性追求(行動の触発)、(2) 損害回避(行動の抑制)、(3) 報酬依存(行動の維持)、(4) 固執(行動の固着)の4次元である。

次に、Cloningerモデルにおける性格とは、相対的に環境規定性の高いものであり、自己概念について洞察学習することによって成人期に成熟するものと仮定されている(Cloninger et al., 1993)。具体的には、(1) 自己志向、(2) 協調、(3) 自己超越の3次元である。

以上のようにCloningerが理論的に想定するような「気質は相対的に安定的で、性格は相対的に可変的である」という枠組みは本当に妥当なのだろうか。パーソナリティは、環境要因によって変容する可能性が数多く指摘されているので、本研究では、ライフイベントの中でもとりわけ精神病理や不適応行動の発現契機との関連が多く報告されているネガティブ・ライフイベントによるパーソナリティへの影響に着目して、この理論的想定を再検証したい。

よって、本研究では、Cloningerモデルの気質・性格次元の安定性を、「環境による影響の受けにくさ」と定義し、「気質次元は、性格次元と比較して、ネガティブ・ライフイベントという環境要因の影響を受けにくいかどうか」という両者の相対的な安定性の差異を、大学生サンプルを対象として縦断的に測定することによって検討することを目的とする。

### 方 法

#### 対象

2002年6月、10月、2003年1月の3回、心理学の概論講義を受講していた大学1・2年生に対して質問紙法による縦断調査を行った。その結果、296名(男性199名、女性97名; 平均年齢18.8歳,  $SD$ 50.81; 1年生235名、2年生61名)から有効回答を得た。

#### 使用した尺度

Temperament and Character Inventory (TCI) (Cloninger et al., 1993) (日本語版; 短縮版) (125項目) (木島・斎藤・竹内・吉野・大野・加藤・北村, 1996)

上述のCloningerモデルに基づいて作成された質問紙がTCIである。4つの気質次元(新奇性追求、損害回避、報酬依存、固執)と、3つの性格次元(自己志向、協調、自己超越)の計7次元のパーソナリティについて、4件法で測定する。

対人達成領域別ライフイベント尺度(大学生用; 短縮版) (60項目) (高比良, 1998)

この尺度は、日本の大学生が日常生活の中で経験すると思われるストレスをネガティブ・ライフイベント、ポジティブ・ライフイベントに切り分け、それぞれを「体験した・体験しなかった」の2件法で回答させるものである。本研究では、ネガティブ・ライフイベント体験数のみを使用した。また、対人領域・達成領域という区分は、ストレス一般を測定する上で有用と判断し、そのまま使用した。

#### 手続き

第1波調査ではTCI(1回目)を、第2波調査では対人達成領域別ライフイベント尺度(第1波調査・第2波調査間)を、第3波調査ではTCI(2回目)と対人達成領域別ライフイベント尺度(第2波調査・第3波調査間)を、それぞれ実施した。また、長期間の記憶想起はあいまいになりやすいことを考慮して、ライフイベント尺度は第2波・第3波調査の2度実施し、2期間の体験数の合計得点をライフイベント体験数として用いた。

## 結果と考察

第1波調査時から第3波調査時までにおける、TCIの気質・性格の各次元得点の変化を、ネガティブ・ライフイベントの各体験数によって予測するために、階層的重回帰分析を行った。具体的には、TCIの気質・性格の7次元のそれぞれについて、第3波調査の得点を従属変数として、共変量として第1波調査時の得点を回帰式に最初に投入し、次に、独立変数として、ネガティブ・ライフイベントの各体験数のセット（対人領域ネガティブ・ライフイベント、達成領域ネガティブ・ライフイベント）を投入するという順序で解析を行った。

その結果、Table 1が示すように、気質次元は、損害回避が達成領域ネガティブ・ライフイベントとの関連を示したものの、それ以外については関連を示さなかった。損害回避の可変性については、予期不能な嫌悪刺激に晒される経験が増加するにつれて、損害回避は上がる（Cloninger, 1986）という理論的予測がなされており、これに整合する結果と言える。また、性格次元は、協調のみ独立変数セットの決定係数増加量が有意にはならなかったものの、ライフイベントの領域を問わず、すべてにおいて偏相関係数が有意となった。具体的には、ネガティブ・ライフイベントの経験は、自己志向を下げ、自己超越を上げる、という結果が示された。Cloningerモデルの性格次元は精神病理的な症状に介入することが報告されているが（Tanaka, Kijima & Kitamura, 1997）、本研究の結果は、性格次元は、精神病理の素因として影響を与えているのではなく、ネガティブ・ライフイベントの結果として変化する精神病理の副産物である可能性を示唆するものと言えるだろう。協調次元については、日本人のサンプルではうまく測定出来ない可能性（Kijima, Tanaka, Suzuki & Kitamura, 2000）やセロトニン・トランスポーターの遺伝子多型との関連性が見られたという指摘（Kumakiri, Kodama, Shimizu, Yamanouchi, Okada, Noda, Okamoto, Sato & Shirasawa, 1999）もあるもので、測定上の問題と気質的な性質について今後さらに検討が必要と考えられる。

以上から、Cloningerモデルの大きな枠組みは、「より環境的影響を受けにくい気質次元、環境的影響を受けやすい性格次元」というように解釈できるが、今後さらに間隔をおいた長期的な縦断調査によって詳細を検討する必要がある。また、気質次元が、ネガティブ・ライフイベントの影響を概ね受けないという結果からは、気質次元をネガティ

ブ・ライフイベントの結果としてではなく、抑うつ、不安などの生起にネガティブ・ライフイベントとは独立に影響を与える脆弱性、素因として考え得る可能性が示唆される。実際、固執を除く気質の3次元から抑うつを有意に予測できたという行動遺伝学分野の報告（Ono, Ando, Onoda, Yoshimura, Momose, Hirano & Kanba, 2002）もあり、パーソナリティと精神病理の関連性を解明していくうえで、Cloningerモデル、とりわけ気質次元に基づいた研究は重要な位置を占めていくものと考えられる。

Cloninger (1986) も指摘する通り、刺激（日常的なライフイベント）の重要性や顕在性の認知に個人差があると考えられる。今後は、それらにも焦点を当てたライフイベントの測定により、Cloningerモデルの気質・性格次元に対するそれらの影響を検討していく必要があるだろう。

## 引用文献

- Cloninger, C. R. 1986 A unified biosocial theory of personality and its role in the development of anxiety states. *Psychiatric Developments*, **3**, 167-226.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. 1993 A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, **50**, 975-990.
- 木島伸彦・斎藤衣衣・竹内美香・吉野相英・大野 裕・加藤元一郎・北村俊則 1996 Cloningerの気質と性格の7因子モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI) 季刊精神科診断学, **7**, 379-399.
- Kijima, N., Tanaka, E., Suzuki, N., & Kitamura, T. 2000 Reliability and validity of Japanese version of the Temperament and Character Inventory (TCI). *Psychological Reports*, **86**, 1050-1058.
- Kumakiri, C., Kodama, K., Shimizu, E., Yamanouchi, N., Okada, S., Noda, S., Okamoto, H., Sato, T., & Shirasawa, H. 1999 Study of the association between the serotonin transporter gene regulatory region polymorphism and personality traits in a Japanese population. *Neuroscience Letters*, **263**, 205-207.
- Ono, Y., Ando, J., Onoda, N., Yoshimura, K., Momose, T., Hirano, M., & Kanba, S. 2002 Dimensions of temperament as vulnerability factors in depression. *Molecular Psychiatry*, **7**, 948-953.
- 高比良美詠子 1998 対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, **14**, 12-24.
- Tanaka, E., Kijima, N., & Kitamura, T. 1997 Correlations between the Temperament and Character Inventory and the Self-rating Depression Scale among Japanese students. *Psychological Reports*, **80**, 251-257.

— 2004. 3. 11 受稿, 2004. 7. 9 受理—

Table 1 TCIの気質・性格次元に関する階層的重回帰分析の結果 (N=296)

	気質								性格					
	新奇性追求		損害回避		報酬依存		固執		自己志向		協調		自己超越	
	R <sup>2</sup>	pr	R <sup>2</sup>	pr	R <sup>2</sup>	pr	R <sup>2</sup>	pr	R <sup>2</sup>	pr	R <sup>2</sup>	pr	R <sup>2</sup>	pr
1. 共変量	.560**		.635**		.504**		.489**		.562**		.566**		.421**	
2. N.L.E.	.001		.008*		.004		.002		.024**		.005		.013*	
対人領域		-.01		.06		.07		-.02		-.11*		-.10*		.14*
達成領域		-.05		.14*		.01		-.06		-.23**		-.10*		.12*

N.L.E.; ネガティブ・ライフイベント体験数, R<sup>2</sup>; 決定係数増加量, pr; 偏相関係数. +p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01